

Title	日本語接続詞の通時的研究 ー日本語接続詞の成立と展開ー
Author(s)	百瀬, みのり
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76317
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名 (百瀬みのり)

論文題名

日本語接続詞の通時的研究－日本語接続詞の成立と展開－

論文内容の要旨

本研究は日本語接続詞の成立について通時的に論じることをその目的としたものである。日本語接続形式は古典語の時代より、前出形式の反復による形式に次いで「活用語の活用形+バ」の形式、準体言を使用する形式、「形式体言+助詞」の形式、接続助詞が見られ、中世語以降に接続詞などが現れたと見られる。

接続詞の成立は中世期以降とされてきたが、その成立のしかたについては副詞に由来するとする説、接続助詞に由来するとする説¹などがあり、未だ定説が見られない状態である。また、特に副詞と接続詞については、当該文中でどちらとして機能しているかの判定の方法により、結果として接続詞の成立の時期が不明確になるという状態が常につきまとうという問題が従来より存在した。

そこで本論では日本語接続詞成立以前の接続形式を上代から通時的に眺め、

1) (第1部) 古代語における接続形式

2) (第2部) 近代語における接続形式

に分けて考察し、その形式の特質を用例から実証的に調査して日本語接続形式について通時的にその意味と機能を考察することとし、

1) については、

第1章 前出形式の反復による形式

第2章 「形式名詞+助詞」の形式(1)－「モノヲ」の形式－

第3章 「用言活用形+接続助詞」の形式

第4章 「指示副詞+接続助詞テ」の形式による接続 について述べる。

2) については、

第5章 「形式名詞+助詞」の形式(2)－「ホドニ」の形式－

第6章 「形式名詞+助詞」の形式(3)－「ニヨツテ」の形式－

第7章 接続詞「デ」の形式

について述べる。

第1章は前出形式の反復による形式をもつ接続形式を扱った。この形式はその表す接続関係が直接的でたどりやすいが、複雑な発話状況の下での接続関係を表す場合には不適切であった。そこで接続関係を表す別の方法として形式名詞を用いた方法が次に考えられるようになったことが推定されると結論付けた。

第2章は「形式名詞+助詞」の形式(1)として、「モノヲ」の形式をもつ接続形式を扱った。「モノヲ」の形式による接続は順接も逆接も表せ、それが接続形式の繁用性につながるが、反面その接続関係の意味が曖昧になるという問題点を用例と共に示した。

第3章は「用言活用形+接続助詞」の形式をもつ接続形式を扱った。用言の活用形に接続助詞「バ」、「ト」、「トモ」、「ド」、「ドモ」などが付いて順接や逆接の仮定条件・確定条件を表すこれらの形式については、①用言活用形のみでは多機能、多意味であったものが「用言活用形+接続助詞」の形式ではその表す機能、意味が専一的になり、形式と機能、意味とが対応的に表されるようになったこと。②接続関係を表す形式の変化が平安時代中期(中古中期)に生じていること。これら二点が確認できた。

第4章は「指示副詞+接続助詞テ」の形式をもつ接続形式を扱った。指示副詞「カク」、「サ」は上代より日本語に見られた形式であるが、それに接続助詞「テ」が付いた「カクテ」、「サテ」は古代語からまともに見られた形式であ

り、副詞や接続詞として用いられた。また、「サテ」については主に中世期以降に感動詞としても用いられた。それらの文の中での機能の変化とその様相をこの章では見た。この章では、①「カクテ」と「サテ」は副詞として文中で機能していたものが接続詞、または感動詞として機能するようになった通時的な変化であると捉えられ、特に接続詞の成立について注目すると、この変化は文法化の観点から説明できると思われること、②古代語において「カクテ」よりも「サテ」が接続詞として展開したのは、「カクテ」と「サテ」の構成要素である指示副詞「カク」と「サ」の用法の差異による。これは金水(1999)が述べる、「カク」は「言語外世界にあらかじめ存在すると話し手が認める対象を直接指し示し、言語的文脈に取り込む」(同、68頁)のものであり、「サ」は「言語外世界とは関係なく、先行文脈によって概念的に設定された対象を指し示す」(同、69頁)のものであるという差異に基づくと考えられること、③古代語の「カクテ」と「サテ」の用法を見ると、これらが文頭に置かれた例もあるが、それらはその前文や前部を具体的に指示している例がそうではない例よりも多いことから、これらは副詞として文で機能していると見られ、よって、「カクテ」と「サテ」、主に「サテ」の接続詞の成立は近代語以降と考えるのが適切であると思われること、を述べた。

第5章は「形式名詞+助詞」の形式(2)として、「ホドニ」の形式を持つ接続形式を扱った。名詞「ホド」はその意味の抽象性の高さから古代語より抽象名詞としての用例が多く見られた語であり、それが助詞「ニ」と結びつき、「ホドニ」の形式となって時間を表す意味から中世期になって原因・理由を表す意味へと変化したと考えられるその変化の様相と原因をこの章では扱った。本章では、①〈原因・理由〉の意味を表している「ホドニ」を特定する客観性のある指標である、「(A:), (B:)」の関係を設定し、それに基づいて〈原因・理由〉の意味を表す「ホドニ」の用例を特定した、②「ホドニ」の〈時〉の意味と〈原因・理由〉の意味が現れた時期に時間差がある点について、「ホドニ」の「ホド」が、上代、中古期には「名詞句+格助詞」としての機能が優先的であったものが、中世期になり連用句を作る機能が優先的となった過程を考え、〈原因・理由〉の意味を表す接続助詞「ホドニ」が成立したことを示した、③「ホドニ」が原因理由を表す意味を獲得した経緯には、語用論的側面に「ホドニ」の構文的条件の変化という文法的側面も関与していることを示した、④「ホドニ」の構文的条件変化という文法的变化は、「ホドニ」の上接句と下接句の複文化が原因となり起こったと考えられ、この複文化を招いた原因は、「ホドニ」の名詞部分「ホド」の文法化であると考えられる、以上を述べた。

第6章は「形式名詞+助詞の形式」(3)として、「ニヨツテ」の形式を持つ接続形式を扱った。

この章では、中世期の資料を用いて「ニヨツテ」の使用状況を確認し用例を挙げて「ホドニ」と「ニヨツテ」の差異を述べ、それを踏まえて両形式には日本語文構造への適合性に差異が認められること、それは両形式の出自の差異によるものであると考えられることを述べた。

さらに、【上接句の承認】、【形式の出自】、【語構成】の三つの着眼点を挙げ、それに基づき中世期の接続形式に見られた「ホドニ」から「ニヨツテ」への交替は、①【上接句の承認】の着眼点からは上接部に採る形式に制限がないこと、②の【形式の出自】の着眼点からは漢文訓読語や書きことばの和語や話しことばに対する優越性を認めてきた日本語についての見方があること、③の【語構成】の着眼点からは形式と意味との特定化の簡便さがあること、について述べ、さらにこの変化は日本語使用者に古代より存在する書きことば優先、漢文優先という認識、見方に則り、より日本語を使いやすくしていこうという意識の現れの一部であろうと思われることを述べた。

第7章は第7章は接続詞「デ」の成立について扱った。接続詞「デ」は近世末期から近代初期に成立したと考えられるが、「指示代名詞ソコ・ソレ+格助詞デ」の形式が副詞「ソコデ」、「ソレデ」、接続詞「ソコデ」、「ソレデ」となり、そこから「ソコ」、「ソレ」が取れて接続詞「デ」が成立した過程と原因を述べることで、一つの接続詞が成立する型を見た。また、接続詞「デ」の成立が文法化の観点ではなくむしろ脱文法化の観点から説明されるべき言語変化ではないかと見られる余地についてはNorde(2010)の脱文法化の全てのタイプに見られる4つの一般性である、「逆方向性」、「新奇さ」、「低頻度性」、「非継続性・非連続性」を挙げて、これらが接続詞「デ」の成立には適用されないことを示し、その見方が不適切であることを示した。さらに文法化がらせん階層型をした言語変化であると考えそのモデル図を提案することで、接続詞「デ」の成立が文法化の観点から説明できることを述べた。

本論全体を通しての今後の課題としては、日本語の接続形式の誕生に大きく関わった、準体言の形式と、日本語の接続形式のかかわりについて述べられなかったこと、また、訓点語の中に見られる日本語接続詞の初期の形について触れられなかったことを挙げた。さらに今後の研究上の見通しとして、言語変化は一つの形式が消えて次の形式が現れるような単線状のものではなく諸現象や諸事態が原因となってそれらが複雑にかかわりながら発展していくものであるので、それら全体をときほぐす気持ちをもって先述の課題についても取り組むこと、今回扱えなかった接続と修飾のかかわりについて外国語の事例も見据えつつ更に考察し、日本語における接続の意味を考えることを挙げた。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (百瀬みのり)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 金水 敏
	副 査 大阪大学 教授 岡島 昭浩
	副 査 大阪大学 准教授 岸本 恵実
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 日本語接続詞の通時的研究－日本語接続詞の成立と展開－

学位申請者 百瀬みのり

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	金水 敏
副査	大阪大学教授	岡島 昭浩
副査	大阪大学准教授	岸本 恵実

【論文内容の要旨】

本論文は、接続詞、接続助詞等の文と文、節と節をつなぐ接続表現を対象とし、古代・中世・近世にわたる歴史資料における実態を調査し、その通時的な変遷について論じたものである。具体的には、「モノヲ」「カクテ」「カカルホドニ」「サテ」「ホドニ」「ニヨツテ」「ソコデ」「ソレデ」「デ」等の形式が扱われている。

構成は、「序章」（本章 第1部 古代語における接続形式）「第1章 古代語における前出形式の反復による形式を持つ接続形式」「第2章 . 「形式名詞＋助詞」の形式をもつ接続形式（1）－「モノヲ」の形式－」「第3章 . 「用言活用形＋接続助詞」の形式をもつ接続形式」「第4章 「指示副詞＋接続助詞テ」の形式をもつ接続形式」（本章 第2部 近代語における接続形式）「第5章 「形式名詞＋助詞」の形式をもつ接続助詞（2）－「ホドニ」の形式－」「第6章 「形式名詞＋助詞」の形式をもつ接続助詞（3）－「ニヨツテ」の形式－」「第7章 日本語接続詞「デ」の形式について－文法化の観点から－」「終章」の合計9章からなる。巻末に参考文献、参考資料、用例採集資料、閲覧資料、初出一覧のリストを有する。

第1章では、原初的な接続形式としての「前出形式の反復」を主に上代文献に求め、分析している。

第2章では、「形式名詞」＋「助詞」に由来する接続形式として「モノヲ」を採り上げ、体言、名詞、形式名詞等の概念および形式名詞「モノ」と「コト」の違いについて検討したのち、上代、中古、中世、近世の資料から「モノヲ」の用例を摘出し、接続表現としての「モノヲ」の比率があまり変わらないことを述べている。

第3章では、「用言活用形＋接続助詞」の形式を持つ接続形式として、已然形＋「バ」、未然形＋「バ」その他を扱い、用言活用形のみでは多機能、多意味であったものが、接続助詞の付加により、意味が専一的になり、形式と機能、意味とが対応的に表されるようになったこと、接続関係を表す形式の変化が平安時代中期に生じていること、等を述べている。

第4章では、「指示副詞＋接続助詞テ」の形式として、「カクテ」「サテ」を中心に、併せて「カカルホドニ」について触れている。特に、「サテ」については、「跳び越しのサテ」「引き取りのサテ」「差し込みのサテ」「話題転換のサテ」等の分類を行いながら詳細に分析し、併せて感動詞「サテ」の発生にも言及している。

第5章から第2部「近代語における接続形式」に入る。この章では、「形式名詞＋助詞」の形式を持つ接続表現として、「ホドニ」を扱い、〈原因・理由〉の意味を表す「ホドニ」の特定について述べ、さらに接続助詞「ホドニ」

の成立要件について資料から跡づけている。

第6章では、「ホドニ」との関連から「ニヨツテ」を採り上げ、「ホドニ」と「ニヨツテ」の差異について分析している。

第7章では、接続詞「デ」について取り扱い、「ソコデ」「ソレデ」と「デ」の関係を“文法化”(grammaticalization)の観点から論じ、これを“脱文法化”(degrammaticalization)とする説について検討し、これを否定している。

終章では、ここまでの内容をまとめている。

【論文審査の結果の要旨】

本論文のタイトルは「日本語接続詞の通時的研究—日本語接続詞の成立と展開—」となっているが、接続詞の成立について通時的・網羅的に論じたものというよりは、広く接続表現(反復表現、接続助詞、接続詞による節と節、あるいは文と文をつなぐ表現)について、古代語からおおよそ中世末期ごろまでの資料を活用し、個々の表現の変化・展開について述べたものである。接続表現について論じるためには、長めの文脈を丁寧に読み解いて、その論理的・情意的な接続関係をくみ取らなければならないが、申請者はこの点、優れた文献の読解力を駆使して的確に分析・分類を行っている。その特質が最もよく現れているのが第4章である。ここでは大きく「カクテ」「カカルホドニ」のグループと、「サテ」とが対比的に扱われており、前者があくまで「カク」「カカ-」という指示詞由来の直示的な性質を失わないのに対し、「サテ」の方は、もともとの「サ」が直示ではなく言語的文脈の照応に由来していることから、容易に“文法化”による用法の展開を生じ、より抽象的な機能を獲得していったと論じている。「跳び越しのサテ」「引き取りのサテ」「差し込みのサテ」「話題転換のサテ」等の命名・分類は卓抜であり、「サテ」の機能の進展を直感的に捉えやすくしていると言える。また今日にも残る、「サテ」の感動詞としての用法が、会話文頭に現れた「サテ」が疑問文と共起する例が多いところから生じたとしている点は説得的である。

また、単に現象面的な整理にとどまらず、理論面においても相応の貢献を認めることができる。論文の各所でトロウゴットらのいわゆる“文法化”(grammaticalization)の理論を引いているが、特に第7章では原典を引きながら、接続詞「デ」の発達が文法化の適用による一方向的な変化であることを詳述している点は、今後の学界における議論にも一石を投ずることとなる。

一方で、問題点もなしとはしない。まずもってタイトルと内容の齟齬は読者の期待をミスリードするものであり、当初の構想から本論文の構成が大きくそれたのではないかとの疑いも招きかねないところである。また、理論的な貢献は小さくないとは言え、論全体が統一的な理論あるいは視点からまとめ上げられたものとはいえ、現象と理論の接続にばらつきがあることは否めない。先行研究への言及も、参照すべき文献が抜け落ちていたり、逆に論旨とは必ずしも関連の深くない引用・参照が見られるなど、十分とは言えない面がある。ジャーナルへの投稿論文から本論に編集し直す際に残ってしまったかと思われるような重複が目立ったり、改めるべき表現が改められていなかったりするなど、やや細やかさを欠いた状態となっている点は残念である。

このようにいくつかの瑕疵も残しながら、必ずしも豊富な先行研究を持つとは言えない当該分野において、久々にヴォリュームのある研究が提示された点は大いに評価すべきものと考えられるところであり、この意味において本論文は博士(文学)の学位申請論文として相応しい水準を示していると認めるものである。